

桜美林論考

The Journal of J. F. Oberlin University

人文研究

Studies in Humanities

2019年3月

March 2019

桜美林大学 人文学系／芸術・文化学系

J. F. Oberlin University Division of Humanities / Arts and Culture

## 【研究ノート】

# 一又正雄文庫を訪ねて

大 中 真 ・ 周 圓

キーワード：国際法史、グロティウス、万国公法、東京裁判

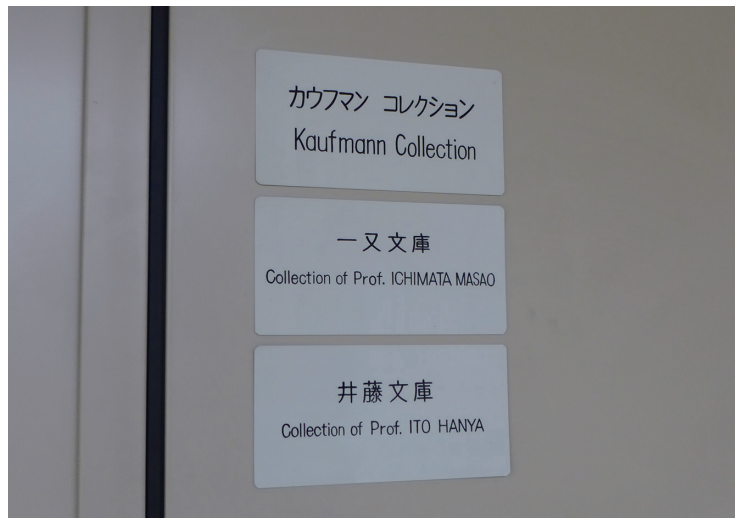
## はじめに

国際法の父といわれるフーゴー・グロティウスの古典『戦争と平和の法 (*De jure belli ac pacis*)』を、原書のラテン語版から日本語に初めて完全邦訳した人物が、本稿で取り上げる一又正雄である。研究者の間でもほとんど知られていないと思われるが、晩年に一又が勤務した明星大学図書館（東京都日野市）に、未公開の「一又正雄文庫」が存在する。筆者の1人である大中真は、桜美林大学と明星大学との大学間交流事業の中で、全くの偶然から、この文庫の存在を知った。その後、数度に亘り、西洋法制史を専門とする東洋大学准教授の周圓とともに一又文庫の調査を行い、学術的にも貴重な蔵書や資料が多数所蔵されていることを確認した。同文庫は、明星大学図書館の蔵書目録にもデータベースにも一切掲示されていないが、同図書館司書の許可を得て、その資料的価値に鑑みて、本稿にて紹介することにした。同図書館司書の方々には数度に亘りご厚意をいただいたことを冒頭で御礼申し上げたい<sup>1</sup>。

## 1. 一又正雄の生涯と一又文庫の由来

一又は1907年（明治40年）7月10日に東京深川で生まれたが、早くに両親と別れ、伯父で弁護士の一又又七によって育てられた。1930年3月に早稲田大学法学部英法科を卒業後、同年に国際連盟事務局東京支局に入った。しかし、ほどなく日本が満州事変により国際連盟を脱退したことで失職し、1936年4月に早稲田大学法学部に国際法の講師として着任した。以後、助教授、1939年には外務省嘱託となったが、1944年に召集され中国戦線に赴いた。この時期の一又は、「大東亜国際法」の確立に力を注いでいた。終戦後辛くも帰国し、1963年に退職するまで早稲田大学教授として母校の教壇に立った。なお、早稲田大学法学部のウェブサイトによれば、1928年に同学部に助手制度が設置されたことによって、一又正雄をはじめとする法学部卒業生が学園に残り、のちに戦後の学制

改革で中心的な活躍をする人材が育ったことが、特に一又の名を上げて明記されている<sup>2</sup>。この間、一又は1958年から64年まで日本学術会議会員を務め、国際法学会理事、日本国際問題研究所常務理事などを兼務しつつ、早稲田大学退職後は明星大学教授として国際法を教えたが、1974年10月26日に67歳で病のため死去した。一又の性格については、当時亜細亜大学教授であった大平善梧（1905-89）が『国際法外交雑誌』に寄せた追悼文の中で、「自我の主張が強く、つまらぬ所で他人と摩擦を生ずる性癖があった」と率直に書いているところに、多少なりとも窺い知れる<sup>3</sup>。



一又文庫のプレート



一又文庫のコレクション

一又正雄文庫は、明星大学資料図書館（旧図書館）4階の一部屋に収められている。写真にあるように、入り口にはプレートも掲げられている。小部屋の入り口扉を開けると、左右に一又文庫資料がずらりと陳列されている。書架手前の一部の本には、「47年11月25日 一又正雄氏寄贈 明星大学人文学部図書館」と記された印章が押されており、昭和47年（1972年）に一又が在職のまま死去したのち、遺族から寄贈されたものようである。かなりの量の和書、洋書、雑誌、資料が保管されているが、残念ながら図書館による目録作成には至っておらず、直接目視によるしか全体の確認はできない。本稿でも、一又文庫の全貌を完全に伝えることは到底不可能であり、概要を紹介するに止まらざるを得ない。なお、筆者2人の研究関心は国際法史にあるため、その分野を中心に調査したことも読者にはご了解いただきたい。

一又文庫は、その内容から次の三つに分類できる。一つは国際法に関する和漢書、二つ目は国際法に関する洋書、三つめは東京裁判に関する資料である。本稿では、その中でも筆者が興味深いと考える資料について解説を試みたい。

## 2. 国際法に関する和漢書

一又文庫でまず目を引くのは、幕末から明治期の日本で刊行された万国公法のテキストである。

- ・『万国公法譯義』全4冊（京都、御用御書物製本所、慶應4年（1868年））

表紙には「英国恵頓氏原著」——恵頓とはアメリカ人国際法学者ホイートン（Henry Wheaton, 1785-1848）のことであり、原著とは『国際法原理』（*Elements of International Law*, 初版1836）を指す。つまり、英国人というのは誤りである——と書かれており、これを丁躰良——アメリカ人宣教師マーティン（William Alexander Parsons Martin, 1827-1916）のことである——が漢訳した『万国公法』第2巻第2章までの内容を元に、堤穀士志が漢文読み下し文で訳したものである。このような経緯により、幕末期から明治初期の日本では「国際法」ではなく「万国公法」の呼び名が一般であった。

- ・『万国公法』全4冊（江戸、大坂、京都、平安書館、慶應4年（1868年））

西周助（西周）訳、「和蘭畢洒林氏」とあり、西が幕命で留学したオランダのライデン大学で国際法を学んだフィッセリング（Simon Vissering, 1818-1888）の講義ノートを基礎に書物にまとめたものである。

- ・『官版 万国公法』全4冊（大阪、官版書籍製本所、慶應4年（1868年））

上記に同じく、西周助訳述、フィッセリングの講義による国際法の解説である。

- ・『国際法 一名万国公法』全5冊（東京、二書堂、明治6-7年（1873-74年））  
箕作麟祥訳、イエール大学学長を務めたウールジー（Theodore Dwight Woolsey, 1801-1889）著『国際法研究入門（*Introduction to the study of International Law*, 初版1860年）』の翻訳である。
- ・『万国公法蠡管』（東京、済美齋、明治9年（1876年））  
丁韪良訳『万国公法』を元に、高谷龍州が注解、中村正直が批閲および序文を付けたものである。
- ・『海氏 万国公法』（東京、司法省、明治10年（1877年））  
海弗得（ヘフトル）氏著、つまり19世紀ドイツの法学者ヘフター（August Wilhelm Heftter, 1796-1880）の著作を、荒川邦蔵と木下周一が訳したものである。
- ・『公法便覧』全6冊（同文館出版、光緒3年（1877年））  
丁韪良によるウールジーの『国際法研究入門』の漢訳本である。
- ・『公法会通』全5冊、再版（北京、同文館出版、1899年）※初版は1880年  
ハイデルベルク大学公法教授ブルンチュリー（Johann Caspar Bluntschli, 1808-81）の『現代国際法（*Das moderne Völkerrecht der civilisirten Staaten als Rechtsbuch dargestellt*, 初版1868年）』の漢訳本である。原著の独語版からラルディ（M. Charles Lardy）等が仏語訳したもの（*Le droit international codifié*, 初版1870年）からの重訳となっており、翻訳作業は同文館（Tung Wen College）館長も務めた丁韪良と教習、学生たちによってなされた。冒頭の序言で丁韪良は、ブルンチュリーに宛てた短文の中で、中国には著作権というものが無いので、勝手に漢訳することをお許しいただきたいと率直に書いている。

以上のように、幕末から明治初期の1860-70年代にかけて、日本に流入あるいは刊行された多数の国際法の書籍が、一又文庫には多数収められている。今回の調査で判明したこととして、そのほとんどに「中村進午蔵書」と読める蔵書印が捺されていた。中村は、明治3年生まれ、東京帝国大学法科を卒業後、外交史や国際法の研究を進め、学習院教授や東京商科大学教授、拓殖大学学監などを務めた。その一方で早稲田大学法科科長を1910-20年に務め、その後も1939年に亡くなるまで早稲田で国際法の教授の職にあった。つまり、一又は中村の薫陶を受けた1人である。「我国国際法学創立の1人」とされる中村の蔵書は、「中村進午文庫」として早稲田大学中央図書館に保存されており、さらにその他に旧蔵書100冊ほどが一橋大学に、1,200冊ほどが拓殖大学に寄贈されている<sup>4</sup>。早

稲田の中村進午文庫は、亡くなった1939年に遺族により寄贈されているので、弟子筋にあたる一又がその際、形見分けとして一部を譲り受けたものと推測される。なお、いずれの書籍も、保存状態が極めて良いことを付け加えたい。

### 3. 日本人国際法学者による著作

次いで目につくのは、日本における国際法学草創期の学者たちによる著作群である。もちろん、他にも膨大な数の蔵書が見られたが、本稿では戦前から戦中に刊行された重要と思われる作品をいくつか紹介するに留めたい。



中村進午の蔵書印が押された『海氏 万国公法』

- ・高橋作衛『戦時国際公法』増補6版（哲学書院、1904年）※初版は1902年刊
- ・高橋作衛『平時国際法論』（清水書店、1904年）

高橋作衛（1867-1920）は、東京帝国大学法科教授として国際法や外交史を教え、政府の要職も歴任した、日本の草創期国際法学者の1人である。

- ・中村進午『新条約論』（東京専門学校、1897年）
- ・中村進午『国際公法論』（東華堂出版、1897年）
- ・一又正雄編『時局関係国際法外交論文集：中村進午博士追悼記念』（巖松堂、1940年）  
前節で解説したように、中村進午（1870-1939）は早稲田大学で国際法教授として活躍し、一又はその弟子に当たる。本追悼論文集も、一又が編者代表を務めている。

- ・信夫淳平『戦時国際法講義』全4巻（丸善、1941年）

信夫淳平（1871-1962）は外交官を務めたのちに早稲田大学で、戦前から戦後まで国際法を教授したので、一又とも交流があったと推測される。信夫は本書により、1943年に第33回日本学士院恩賜賞を受賞した。

- ・立作太郎『戦時国際法論』（日本評論社、1931年）※1938年には第7版を数えている。
- ・立作太郎『平時国際法論』（日本評論社、1930年）※1942年には第11版を数えている。
- ・立作太郎『時局国際法論』（日本評論社、1934年）

- ・横田喜三郎編『国際法論文集：立教授還暦祝賀』（有斐閣、1934年）  
立作太郎（1874-1943）は東京帝国大学法科で国際法を教え、数多くの著作を残し、外務省囑託として亡くなるまで日本外交にも携わった。立の著作は一又文庫に多く収められている。
- ・松原一雄『現行国際法』全2巻（中央大学、1924年）
- ・松原一雄編『最近国際法及外交資料』（育成洞、1942年）  
松原一雄（1877-1956）は、法政大学をはじめ各大学で国際法を講義し、国際連盟協会発行の『国際関係通観』の執筆代表も務めた。一又とは、連盟関係で接点があったと推測される。
- ・寺田四郎『国際法学界の七巨星』（立命館出版部、1936年）  
上智大学教授などを務めた寺田四郎（1886-1977）による、日本で最初の本格的な国際法史研究である。
- ・『戦時国際法規綱要』（海軍省大臣官房、1942年）※初版は1937年刊  
国際法規の中で、主に海戦関係のものを収録したもので、巻頭で当時海軍次官だった山本五十六が、「榎本海軍教授兼書記官の編纂によるもの」と書いており、榎本重治（1890-1979）を指すものと思われる。

#### 4. 東京裁判関連資料

一又文庫で興味深かったのは、東京裁判関連の資料が大量に所蔵されていることである。大平によれば、一又は戦後、東京裁判の資料に頭を突っ込み、「初め時事通信社と提携し、後には法務省の後援を得て戦犯裁判資料の整理読解に献身」したという<sup>5</sup>。資料内容は、裁判の速記録など、ガリ版刷り手書きを含む未整理の文書類である。一又の努力は後に776頁にも上る大著、東京裁判研究会『共同研究 パール判決書 太平洋戦争の考え方』（東京裁判刊行会、1966年）の刊行に繋がった。同書の序には、法務省司法法制調査部戦犯調査室が蒐集した資料の使用なくしては刊行できなかった、と書かれてあるので、或いはその資料がそのまま明星大学の一又文庫として残されている可能性はある。因みに東京裁判研究会の構成員としては、一又を筆頭に角田順（法学博士）、阪埜淳吉（弁護士）、豊田隈雄（法務省参与）、井上忠男（法務省参与）の5名が記されている。専門家による資料価値の判定を待ちたい。

## 5. 一又自身の著作

一又自身による代表的な業績は、やはり古典の翻訳であろう。冒頭で紹介した大平も、以下の4つの業績をその筆頭に挙げている。

- ・ アンチロッチ『国際法の基礎理論』一又正雄訳（巖松堂、1942年）

イタリアの国際法学者ディオニシオ・アンチロッチ（Dionisio Anzilotti, 1867-1950）の著書 *Corso di diritto internazionale*（1915; 4<sup>th</sup> ed. 1955）の翻訳である。彼はパレルモ、ボローニャ、ローマの各大学で教授を歴任し、常設国際司法裁判所の判事に任命され、1928-30年には同裁判所の裁判長も務めた。同書は、1971年に酒井書店から復刻された。

- ・ グローチウス『戦争と平和の法』全3巻、一又正雄訳（巖松堂、1950-51年）

国際法の父、オランダの国際法学者フーゴー・グロティウス（Hugo Grotius, 1583-1645）の古典 *De jure belli ac pacis*（1625）の翻訳であり、今日に至るまで唯一の完全日本語訳版である。一又自身の訳者あとがきによれば、戦前の1936年から、早稲田大学卒業生の朴洪奎を助手として翻訳を始めたが、1944年8月に一又が軍に召集され中断、空襲中にも妻に原稿を入れたトランクを守らせた逸話が載っている。同書3巻本も、1996年に酒井書店から復刻版が刊行された。

- ・ ブライアリー『国際法』一又正雄訳（有斐閣、1955年）

オックスフォード大学教授を戦間期から第二次世界大戦後まで務めたイギリスの国際法学者ジェイムズ・レスリー・ブライアリー（James Leslie Brierly, 1881-1955）の名著 *The Law of Nations*（1928; 6<sup>th</sup> ed. 1962）の翻訳であり、日本でも広く読まれた。

- ・ コーベット『国際関係における法と社会』一又正雄訳（日本外政学会、1957年）

カナダの国際法学者パーシー・エルウッド・コーベット（Percy Ellwood Corbett, 1892-1983）の代表作 *Law and Society in the Relations of States*（1951）の翻訳である。

一又自身による著作や論文も非常に多数にのぼる。しかし本稿では、次の2つだけを取り上げる。

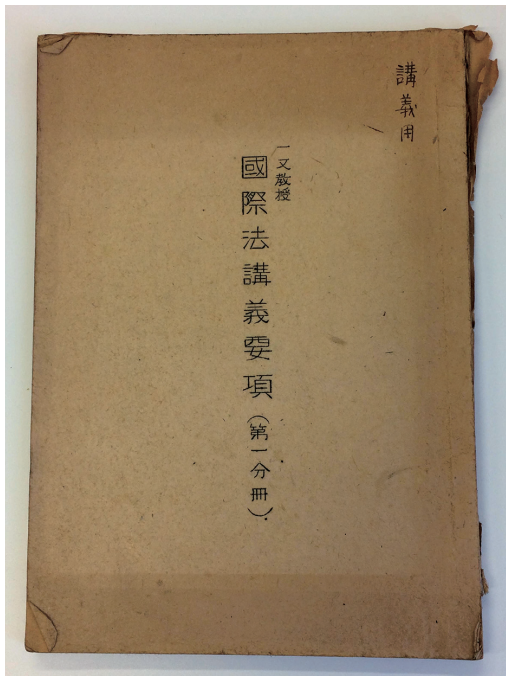
- ・ 一又正雄『国際法』（酒井書店、1972年）

死の2年前、すでに早稲田大学を退職し明星大学で教鞭を取っていた時期に刊行されたテキストである。国際法の発達を古代から書き起こし、東洋近世と西洋近世の国際法を対比させて論じるなど、序論で国際法史に大きくページを割いているのが特徴であり、一又の学問的関心が窺える。序論の内容は、自ら訳したアンチロッチや、特にオー

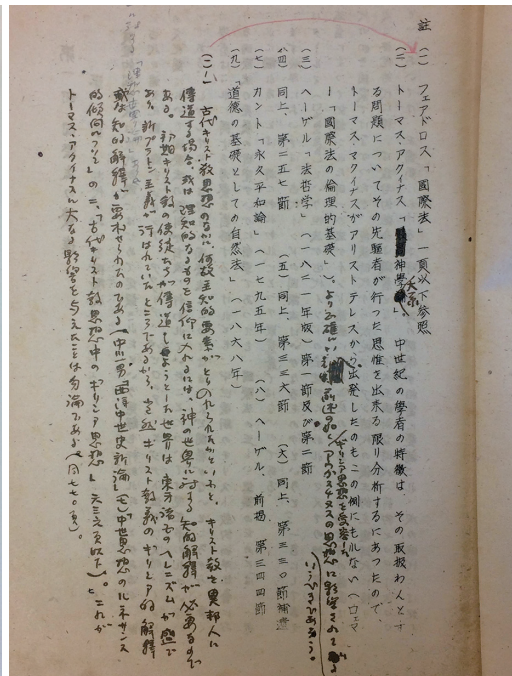


ストリアの国際法学者フェアドロス (Alfred Verdross, 1890–1980) の国際法史の見解に多く依拠しているようである。今回、一又文庫で見つけたガリ版刷りの『国際法講義要綱』第一分冊、第二分冊 (1946 年) がその基礎になっており、目次構成や内容も大きくは変化していない。おそらく一又自身の手になる書き込みを『要綱』の中に見ることができる。

また文中では、「国際法学は自然法理論に対して実定主義が次第に台頭し、ついに勝利を得るに至った。すなわち 19 世紀に入っても自然法主義、実定法主義、グロチウス派の三学派の対立が存していたが、実定法主義は徐々に勢力を得て 19 世紀の終わりから 20 世紀の初めにおいて断然他を圧した」と書かれてある。この学説史解釈は明らかに、イギリスで活躍した国際法の大家であるオッペンハイム (Lassa Oppenheim, 1858–1919) の『国際法論』(International Law, A Treatise, 1905–06) を基本に書かれている。一又は註で、『国際法論』第 5 版 (1935) を出典として挙げており、この学説史解釈は「ロウターパクトの意見であろう」と述べている。ロウターパクト (Sir Hersch Lauterpacht, 1897–1960) はオッペンハイムの死後に『国際法論』の改訂出版を続けたイギリスの国際法学者だが、この一又の見解は誤りである。なぜなら、国際法の歴史を自然法主義、実定法主義、グロチウス主義の 3 つに分類してその盛衰を論じたのはオッペンハイムで、既に 1905 年出版の初版において明快に論じられているからである。



『国際法講義要綱』の表紙



『国際法講義要綱』の内部、  
一又正雄の書き込みが見られる

- ・ 一又正雄『日本の国際法学を築いた人々』（日本国際問題研究所、1973年）

日本の国際法史を知る上でも貴重であるが、なぜか国立国会図書館にも蔵書がなく、所蔵先は限られている。ざっくばらんな筆致で書かれているが、冒頭でも紹介した一又の性格を彷彿とさせる文章のように思える。

## おわりに

以上に紹介したのは、一又文庫全体のごく一部である。国際法の研究書は和洋問わず多くの蔵書があり、全く触れられなかったが、学術雑誌のコレクションも見ることができる。また、一又が戦前に外務省嘱託を兼ねていた関係から、国際連盟や外務省関連の資料も見出せる。しかし、残念ながら、今回の調査で筆者が最も期待していた資料、つまりグローチウスの『戦争と平和の法』にまつわる元原稿、手紙類、翻訳調査のための資料や出版に向けての書類などは、発見できなかった。今日では、一又訳『戦争と平和の法』には、多くの不適切な訳や、文体の分かりにくさが指摘されているが、それでもラテン語原典から完全に日本語訳した業績はやはり大きい。同書が戦後日本の国際法研究に与えた影響力からしても、今後さらに関連資料が発見されることが期待される。

(追記) 本論文中の写真は、明星大学図書館の許可を得て、すべて大中真が撮影した。

## 【参考文献】

一又正雄『国際法』（酒井書店、1972年）

一又正雄『日本の国際法学を築いた人々』（日本国際問題研究所、1973年）

グローチウス『戦争と平和の法』全3巻、一又正雄訳（巖松堂、1950-51年）

## 【注】

- 1 とりわけ、一又文庫の存在をご教示いただいた明星大学専任職員の名取淳氏と、数度に亘る調査に際して便宜をはかっていただいた明星大学図書館職員の本田潤氏に、感謝申し上げたい。
- 2 「早稲田大学法学部について、沿革」<<https://www.waseda.jp/foaw/law/about/history/>>  
(最終閲覧日 2018年7月18日)
- 3 大平善悟「一又正雄博士の逝去を悼む」『国際法外交雑誌』73巻5号（1975年）541-547頁。
- 4 「中村進午文庫」『早稲田大学図書館報 ふみくら』15号（1988年）  
<<http://www.wul.waseda.ac.jp/Libraries/fumi/15/15-16.html>>（最終閲覧日 2018年8月7日）
- 5 大平、前掲論文。